



## 「真実を言い表すのに、 多くのくふうと技巧が必要だった」

中澤 香奈 (柳原/高校 46 回)

広島女学院中学校に入った直後の映像は、30年以上たった今でも目に焼き付いているのですが、中学高校のことは、今となってはぼんやりとした記憶になっています。それでも毎日の慌ただしい暮らしの中で、ふとした時に中学高校でのワンシーンを思い出すと、にんまり楽しい気持ちになります。

アメリカの小学校から帰国子女枠で入学した私にとって、広島女学院には前知識がなかったため、見るもの、聞くものすべてが新しく、制服を着た女性だらけの教室というのがなんとも新鮮でした。中学2年生は今思うと反抗期真っ盛りで、現在校長を務めていらっしゃる渡辺信一先生には大変お世話になりました。女子校ならではの、異性を気にしないでいいマイペースで自由な雰囲気を楽しみ、時には謳歌しすぎて先生方に怒られていました。高校では、森永先生の現代文の授業が好きでした。夏目漱石や森鷗外などの文豪の作品に触れながら、日本文学の面白さの一片を垣間見せていただいたなど感謝しています。本に描かれる東京の街に思いを馳せ、大学は東京に行きたいと思うようになったきっかけでもあります。森永先生には授業以外で『金色夜叉』などの書物をお借りし、友人と交互に読んだのも懐かしい思い出です。卒業時には先生から、J-P・サルトルの言葉をいただきました。「真実を言い表すのに、多くのくふうと技巧が必要だったし、真実を理解してもらうのに、多くの善意と想像力を持ってもらわなければならなかった」。現代文の教科書に載っていた一節で、その後、何度も立ち返ることになった一文です。

卒業後は慶応義塾大学の総合政策学部に進み、東京の出版社に勤めました。出版社勤務といっても、高校の頃に好きだった文学作品とは仕事では縁はなく、現代社会で必要とされている実用誌を作ることがメインです。最初はピンと来ていな



かった実用書ですが、世の中の人々がまさに今知りたいと思うことや欲しいものを、本として作り上げることに、楽しさとやりがいを見出すようになりました。たとえ同じテーマでも、どの著者と、どういう切り口で、どういった体裁の商品にするかで、売れ行きがまったく変わります。

自分が手掛けた本で最初のヒットにつながったのは、『絵本からうまれたおいしいレシピ』という料理本で、シリーズの販売は30万部を超えました。長く愛されてきた絵本や児童書に出てくる憧れの菓子やお料理を、家で実際に作ってみようという企画です。『ぐりとぐら』のかすてら、『ハイジ』の白いパンなど、自分自身が好きだった本の世界を再現するのは夢があり、きっと親子で楽しんでくれるだろうと、読者の姿がイメージできました。

また、韓国ドラマが大人気だったタイミングで韓国語のドリルを編集し、それも韓国語を学びたい層の増加と合致し、10万部以上売れました。市場には文法や会話文から学ぶ形式の教科書が多い中、日本の小学生が学ぶ漢字ドリルのような体裁でハングルを書いて覚えると、学習者は面白く

学べるのではないかという視点からスタートしました。

売れる本を作るのもやりがいがあったのですが、何冊もの本を作っていくうちに、「誰かが本を手にとって、その人の一日がちょっとでも楽しくなる本を作りたい」という想いが強くなっていきました。「誰かの役に立つ」。この考えは、女学院にいる時に、先生を通じて、聖書の時間や礼拝を通じて聞いてはいたのですが、10代特有の自分中心の世界観には響くものではありませんでした。理想ではあるとは思っていても、実感としてはなかったのです。数十年経って、自分の根の部分にそういう想いが育っていたことに気づきました。広島女学院で学んだ、細かな学業面のことは、不甲斐ないことにあまり覚えていません。しかし、礼拝での先生や友人のある一言、毎年面倒だと思っていた平和・人権学習のことは、不思議と思い出すことができます。

現在は、京都でフリーの編集者として仕事をしています。2021年は、東日本大震災から10年の

年でした。残念ながら日本は自然災害の多い国です。そんな中でもなんとか生きぬく力をつけられないかと『おしゃれ防災アイデア帖』という本を作りました。地震がきたら危険だよ、防災しなきゃ、という啓発的な内容では、日常生活の中で備えを続けるのは難しいと自分自身の反省がありました。だからこそ、「何から始めたらいいかわからない」「置き場所に困る」「めんどくさい」という巷の本音を汲み取りながら、楽しい気持ちで防災を進められる内容を目指しました。かつて、人間の心理面から防災をうながす書籍『人は皆「自分だけは死なない」と思っている』も作ったのですが、今回は普段の暮らしを大事にしながら防災を続ける方法です。生活にとけこみ、見るとほっとする防災アイテムの選び方や収納の仕方、インテリアとのバランスを紹介しています。

自分一人の力は微力です。しかしそれを少しでも世の中を良くするために使う喜び、工夫してみる面白さを広島女学院で過ごした6年で教わっていたんだと、今になって深く感謝するのです。